

日本の伝統・文化を継承する若者たち

# 明日への扉

Door to Tomorrow



Sotatsu Kamikawa

1980年東京都生まれ。上川家は祖父の代から続く老舗で、父を筆頭に4人のきょうだい全員が銀師。本名は達映だが、銀師となったときに「宗達」の雅号を与えられた。2011年に、東京銀器の分野において最年少で伝統工芸士の認定を受ける。



東京銀器 (とうきょうぎんき)

江戸の粋な心と技を今に伝える銀製品。銀器は日本で古くから用いられており、室町時代に各地で銀山が発見されると、本格的につくられるようになった。一般に銀製品が使用されたのは江戸時代に入ってから。現在は国の伝統的工芸品に指定されている。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

**MOVIE**  
WebやTVなどでお楽しみいただけます。

**Web版**  
パソコンやタブレットでバックナンバーがご覧になれます。

アットホーム明日への扉

**TV番組**  
ディスカバリーチャンネル (CS) 冠番組  
「アットホーム presents 明日への扉」放映中  
毎週金曜日 22:53~23:00

**NEW!!**  
最新号のご案内

No.044 / 草木染織家 山岸 久子 氏

## 東京銀器銀師

上川 宗達 氏

しろがね

一振りの槌に魂を込めて、銀にいのちを吹き込む。

美しい輝きの中に、凛とした趣を感じさせる銀器。日本では江戸中期から盛んにつくられるようになり、その職人は「銀師」と呼ばれた。

材料の銀は各地にあった貨幣製造所「銀座」で売買されたが、徳川幕府が金銀の取り締まりを厳しくするため銀座を江戸に限ると、銀師も江戸に集結。町の名が東京へと変わってからも銀師はさまざまな品をつくり出し、やがてこの地から生まれる銀製品は「東京銀器」と名付けられた。

上川宗達さんは、江戸の名匠の流れをくむ伝統工芸一家に生まれ育った若き銀師。高校卒業と同時にこの道に入り、きょうだい4人で切磋琢磨しながら修業を積んできた。

いつ家業を継ごうと思った?

上川「小学校の文集に、将来金属の仕事がしたいと書きました。ですから、

今は夢が叶ってるんですね(笑)」

父であり師匠の宗照さんから技を学び、さらに独学を重ねて伝統工芸士となった上川さん。工房では湯沸し(やかん)の製作に取り組んでいた。それは銀器づくりの中でも高度な技が求められるという。板状の銀をなまし、木槌で大きく、金槌で小刻みに何度も打ちながら湯沸しの輪郭を整えていく。

※加工しやすくするために、加熱して冷やす作業。

技をより高めるために、常に自分と厳しく向き合う。表面に残る細かな凹凸は、手業の味わいと済ますこともできるが、経験が浅いからこそきつちりつくるのが大事と、さらに槌を振り続ける。

表面を滑らかに仕上げると、模様を打ち込む。丸一日作業を続けても、進む幅はわずか数mm。精魂を尽くして全て打ち終えると注ぎ口をつなぎ、最後につるを留める。果てしない

作業の末、何の変哲もない銀の板が湯沸しに生まれ変わった。

うれしいことは?

上川「父に『よくやった』とか『がんばったな』と言ってもらったことがないんです。ただ『いいんじゃない?』って。でも、その一言が最高にうれしいんです」

父のようになりたい。そんな思いを胸に弟子入りして10余年。今も、寝ても覚めても銀器のことばかり考えているという若き銀師は、父の背中に追いつくまで、ひたすら前に進み続ける。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

**MOVIE MORE!!**  
溢れんばかりの情熱を持って、銀に挑む姿を動画で詳しくご紹介しています。ぜひご覧ください。

※2012年11月取材。掲載内容は取材当時のものです。